

# 弦楽器の基礎知識

## 6) 楽器の調整

弦楽器は木でできているため、長年の間に少しずつ変化し、多かれ少なかれ演奏上の不都合が生じてきます。その時にあわてる事のないように、普段から楽器の正しい知識を修得しておきましょう。

楽器の修理調整がうまい人の見分け方を教えましょう。楽器の修理職人をするのに日本ではどんな許可も資格も必要がありません。つまり、いつだれでも自分が楽器職人だと宣言すれば、その時から楽器職人なわけです。もっともイタリアでも楽器修理屋になるには商工会議所に登録して毎年税金をたっぷりおさめるだけですが、ですから人によって修理の技術などまちまちです。人のうわさも、どこまで確かなのかわかりません。それではどのようにしたらいいでしょう？

楽器を修理、調整するときは、納得がいくまで内容を尋ねること。難しすぎてわからなかったり、疑問が残っていれば、その日は楽器をもって帰って、勉強しましょう。できれば信用のできる英語などの本や雑誌(よく修理や調整についての記事も書かれている)を読んでほしい。専門書や"Strad" や "Strings" (注・日本の雑誌の「ストリングス」ではありません)など。あるいは他の修理屋の話聞いてみるなど、下準備してから出直すこともできます。経験豊かで優秀な職人は楽器に対しての知識を惜しむことなく話してくれるでしょう。

元の話に戻りますが、まず、楽器自体の構造にひずみの出てきた場合。例えば、ネックが下がってきたり、ペグの回り方が悪くなってきたりした場合は、ネックを上げたり、駒を削ってあわせたり、ペグを削ってあわせたりします。また、演奏家の好みによる調整というのがあります。駒のカーブや、駒の高さ、弦の間隔など、演奏家の希望により、ジャストフィットした調整を行うことがあります。この場合、楽器の特性もよく考え、多くの問題が起こらない範囲内で調整を行います。そして、楽器の可能性をより引き出すための調整というのがあります。例えば、魂柱の位置を変える、魂柱の太さや長さを変える、駒を薄くする、又は厚くするなどといったことです。これには多くの難点があります。というのは楽器の音を言葉で表現するのは不可能に近く、意志が間違っただけで伝わってしまうこともありますし、また演奏する環境によって音が変わることも考慮に入れなければなりません。そのうえ音の好みは人によってまちまちです。

日本人はヨーロッパの人々に比べてずいぶん異なった感覚をもっています。もっとも、同じイタリアの中でも地方によって好みの傾向が微妙に違っていたりすることは大変興味深いです。(私は言語-方言も含めて-にその一因があると確信しています)。私はイタリアでヴァイオリンの演奏家でもあった都合上、友達の楽器の調整を毎日やっていました。彼らはオープンな性格で、機関銃のようにしゃべりまくりますが、建て前がなく本音と冗談を入り交じえた会話なので、とても楽しかった事を今でもなつかしく思い出します。日本では質問しても、仮面をかぶった人が多く、調整しても本当に満足してもらったのだろうか?と疑問に思うことが多く、残念です。というわけで、調整する人の独断と偏見による調整にならないためにも、演奏者の積極的な主張が必要になります。

恐ろしいことに日本では閉鎖的なお国柄か、間違った知識があふれています。先生の言うことを無条件にすなおに受けとめることが良いことだと考えられている習慣が日本にまだ残っていること事態が異常だと思いますが、たとえば疑問があれば複数の人に質問しましょう、答えがまちまちだったりするでしょうが、その中で間違いを見つけていくことが正しい知識を得ていくうえでの第一歩です。自分の大切な楽器は(財布も含めて)、ひとまかせにせず自分で守るように心がけましょう。